

熊本学園大学水俣学研究センター第20期公開講座
2023年10月3日（火）エコネットみなまた（水俣市南福寺60番）

**「来民開拓団の真相」に学びながら、
「開拓慰霊祭のこころ」を受け継ぐ子どもたち**
～部落差別の現実には学び、反差別のなかまづくりへ～

旧満州来民開拓団遺族会会長 森山英治

毎年、8月17日、私たちの部落では開拓慰霊祭が行われている。
解放子ども会を中心に、「わっしょい、わっしょい」と小中高生と一緒に神輿
を担いで、開拓慰霊祭のこころを受け継いでいる。私たちは、これを「たたか
いの祭り」と言っている。276名が「満州」の地で集団自決をし、尊い命が
奪われた。なぜ、その真相を明らかにし、伝えていく。

77年前、1945（昭和20年）年8月17日敗戦後2日後、集団自決。
一人の伝令者を残して、276名が自決していった。
私の叔母も、当時中学生2年生で、自ら毒（青酸カリ）を飲んで、・・・亡く
なった。幼い子どもたちが、楽しみにしていたのは、みんなで運動会をするこ
とでした。学校があった。私の父は・・・

「チサ子、行くなよ、何度も止めたが、.....自決の時は、13歳であった。」と父
から初めて叔母の自決の真相を知ったのは37年前、30歳の時であった。「なぜ、
276人の人々が集団自決をさせられたのか」「なぜ、来民開拓団が編成させられ
たのか」。闇に葬られていた「真相」を、一人また一人と遺族の人たちから聞いた
びに、多くのかけがえのない命が無惨にも国策という名によって見捨てられたか
と思うと、やり場のない怒りが次から次へときみあげてくる。

その「真相」が明らかにされる契機となったのは前述の来民開拓団に対する差別
発言であった。この発言は「このままじゃいかん。なんとかして来民開拓団のこ
とを正しく伝えねばならない」という部落の怒りを一気に燃え上がらせた。支部や遺
族会、解放子ども会を中心に真相を明らかにするため、解放文化祭へのパネル展示
を皮切りに、『赤き黄土』の発刊へ、そして「燃えさかる炎、来民開拓団の解放詩
劇」の取り組み、さらに、鹿本町隣保館10周年記念式典での解放劇（小・中・高）

へと、部落差別との闘いは続いていった。

「国策で部落が向こうへもって行かれたということだが、あの頃は何も考えのおよばんことばかりだった。その当時は、教育は受けたが何がなんだかわからんで差別のしくみも何も知らなかった。今のように同和教育が盛んだったら。学習ばせなん。分かっとったら、絶対に行かせんだった。」と無念さを噛みしめて語っていた父も、67歳で叔母のもとへ逝ってしまった。また、中国への念願の墓参が実現し、「当時、子守奉公は私たち二人だけであった。それが差別とは分からなかった。みんな家族で助け合い生きてきた。今まで恥ずかしくて人の前ではとても話せなかった。」と、生き残った叔母たちは今語る。差別から解放されたいという部落の心を踏みにじり、差別の原因をあたかも部落側にあるように仕組んできた差別政策を正面から捉えない限り、276名の集団自決した真の背景は分からない。

「分かっとったら……」ゆえに、その「真相」をしっかりと部落の親や子どもたちとともに受け継ぎ学んでいかねばならない。そのことを276名の命、墓標は今も静かに教えている。

「真相」が明らかにされてこそ、未来があるのだから。

人の世に熱あれ、人間に光あれ、すべての人たちに。

語ると自分が好きになりますね。

語ると人に優しくなりますね。

語ると必ず、応えるなかまがいますね。

語ると自分が誇れますね。

語ると自分のふるさと、部落の生まれに誇れます。

1 わたしがいつも大切にしていること

であい・・・子どもと向き合うということは、どういうこと

子どもと向き合うということは、子どもの姿から学ぶことです。

学ぶとは、まず子どもの話をじっくり聞くこと・・・認め合うことが大切。

子どもの事実から出発するということ

いじめ・不登校：子どもの声をいっぱい届けること。声にならない声を届けること

子どもの背景をとらえるということ

子どもの暮らしを見つめること差別が一番見える位置、家庭訪問です

立ち位置・・・いつも子どもの隣に座っている自分？がいるのか？

自分自身の生き方を示す。いじめや差別は絶対許されない。

つながる・・・子どもを「見つめ」自分を「綴り」なかまに「語る」

「見つめる」とは・暮らしを見つめる。

「綴る」とは・暮らしを綴る。

「語る」とは・暮らしを語る。今日のテーマになりますね。

わたしがいつも自分に問い続けていること

子どもを語るとき、親を語るとき、なかまを語るとき、部落を語るとき、実践を語るとき、それは、「私を語る」ときであるといえます。

「自分を語る」から子どもたちにも「自分がある」

部落問題が自分の課題となります。

部落差別にたち向かって生きる子どもたちとはどんな子どもたちか。

それはどんな教育のいとなみの中で育っていくのか。

そのとき、教師もまた、部落差別をはじめ一切の差別に対してたち向かっていけるものであること。などの問いあいを通してながら、

私たちは私たちの「足場」を確かにしてきました。

「声にならない声を聞き取っていきましょう」

差別が見えなかったら、差別をなくす学習にはなりません。

差別が一番見える位置とはどこですか。それは自分のくらしのなかにこそ見えるのです。

差別をなくす学習は、差別をなくす行動につながらなければ意味がありません。

行動は、自分の課題だから行動できるのです。では、自分の課題とは何ですか。

2 部落問題認識とは

戦前は部落責任論が主流であった。部落差別の原因や責任は部落の側にあると考えられていた。部落があるから部落差別があるという間違ったとらえ方は今もある。差別をどうとらえるかによって、その後の政策や取り組みは大きく変わる。部落があるから、部落差別があるのととらえれば、部落差別をなくすためには、部落をなくせばよいということになる。こうして打ち出されたのが部落からの「満州」移民政策であった。「満州」移民は、当時の我が国の重要国策であった。資源調整事業という名の融和事業は、「部落を『満州』に移せば、部落問題も解決するし、国策にも合致する。まさに一石二鳥の政策だ。」と考えられた。国は「満州に住めば差別は解決する」と盛んに宣伝し、全国から25地区を特別指導地区に指定して、部落からの「満州」移民を強力に推進した。

その最大の犠牲者が熊本県から入植した来民開拓団である。全国に先駆けて25地区の中で最初に移民した来民開拓団は、敗戦から二日後の1945年（昭和20年）8月17日、唯一人の伝令者を残して、当時団にいた276名全員が集団自決に追い込まれた。開拓団全滅という「満州」移民史上例のない非業な最後を遂げたのである。その一番の犠牲者が、幼い子どもたちだった。犠牲者の半数近くが15歳以下の子どもたちで、一番多かったのが3歳や4歳の子どもたちだった。差別は、あくまで差別する側の問題である。決して、差別される側の問題ではない。部落があるから、部落差別があるのではない。差別する人がいるから部落差別があるのである。

間違った部落差別の捉え方で打ち出された国の政策や事業、その最大の犠牲者が来民開拓団である。

差別は、あくまで「差別する側」の問題である。決して、差別される側の問題ではない。しかし、私たちは差別を「差別される側」の問題にできていない。

そのことをいつも視座にし、大切にしながら、そこから部落差別そのもののしくみや差別との闘いの歴史を明らかにすることはもちろん大切です。しかし、それだけではありません。

むしろ、部落を取り巻く社会のあり方を社会のしくみを歴史的に問い直すことでもあります。

3 来民開拓団の真相に学ぶ・・・

「来民開拓団の真相」とは

来民開拓団は、1941年5月から1945年8月にかけて、旧「満州」、現在の中国東北部の吉林省扶余県五家站町に入植した。この開拓団は8月17日、敗戦の混乱の中、開拓団全滅という「満州」移民史上例のない非業な最期を遂げなければならなかった。ただ一人の伝令者を残して、276人全員が集団自決を遂げたのだ。そのほとんどが部落の人たちだった。

敗戦時で82戸316名にのぼった来民開拓団は、その9割が部落からの入植者だった。このうち7割が来民町（現在の熊本県鹿本町）の部落から、あとの2割が山鹿や植木、鹿央、玉名、菊池など周辺の地域から参加した人たちで、そのほとんどが親類縁者だった。なぜ部落の人たちが中心だったかというと、来民開拓団が融和政策によって送り出された開拓団だったからだ。

部落であるがゆえに、国は名指しで熊本県の中からただ1カ所、資源調整事業の特別指導地区に指定し、強制的に中国侵略戦争に動員した。そして、敗戦となるやこれを見捨てて孤立させ、集団自決に追い込んでいった。その最大の犠牲者は、何の罪もない幼い子どもたちで、半数以上が15歳以下の子どもたちだった。中には生まれたばかりの赤ん坊や母親の胎内に宿ったばかりの新しい命も犠牲になった。

しかし、この「部落の人たちが満州に送られて自決した」という「真相」は、長い間ずっと闇の中に葬られ続け、県も町もそのことを認めようとはしなかった。そのため「一旗あげようと思って行ったつだけん、戦争に負けたつだけん仕方んなか」「こっちの人たちも向こうの人たちに無理なこつばしとらすけん、そん仕返しは受けたつは自業自得たい」という誤った見方や考え方もあった。

そのうえ、「来民開拓団は犠牲者ぶっとるばってん、部落だから子どもや女、親まで殺せたんだ」という差別発言もあった。はらわたの煮えくり返るような怒りの中で、自決後44年を経てはじめて「来民開拓団の真相」を明らかにした（1987年12月17日：“来民開拓団のことを何等かの形で訴えたい。来民開拓団の展示に取り組みたい。”“小学校・中学校・高校・支部一体となって取り組んで欲しい。”と支部長・区長より小・中・高の推進教員・主担者に対し、提起。1988年2月21日：第4回熊本県解放文化祭に於いて展示並びに遺骨収集の署名活動を行う。その後遺族会より聞き取りを始める。1988年10月14日：部落解放同盟熊本県連合会鹿本支部、並び

に来民開拓団遺族会により「旧満州来民開拓団」の記録「赤き黄土」の発刊につながる)。当時の来民町議会の会議録に、来民開拓団が融和政策によるものであったこと、国策にそって国・県・町・融和団体が一体となって送り出したことがはっきりと記されていたことを確認したのだ。

いったい来民開拓団は「誰によって、誰のために、何のために編成されたのか」「なぜ、集団自決を、非業な最期を遂げたのか」「なぜ、開拓慰霊祭が子どもたちを中心に行われ、引き継がれていっているのか」。これらのことを明らかにしていく動機となったのが前述の差別発言であり、鹿本支部を中心とした部落側の怒りだった。

開拓団の真相を明らかにする活動によって、鹿本支部や遺族たちの手で『赤き黄土一地平からの告発来民開拓団』という一冊の本として出版され、さまざまな人々からの証言・公的資料によって真相が浮き彫りにされた。つまり、来民開拓団は国家の重要政策と結んだ融和政策と農業政策（分村計画）にもとづいたものであること、その基本は資源調整事業すなわち部落を旧「満州」に移すという融和事業であったことが明らかになったのである。

来民開拓団が目指していたのは“差別と貧困からの脱出”だった。そうした解放への夢と願いを巧妙に利用し“差別なき新天地”という幻想をふりまきながら、その裏には、開拓団の人たちを中国人に対する差別抑圧者として駆り立てていったのだ。これこそ来民開拓団の悲劇の最大の原因であった。

「憎むべきは、恨むべきは戦争であり差別である」

そのことを来民開拓団の人々は、かけがえのない276柱の命をかけて教えてくれているのだ。

（１） 来民開拓団の真相とは何か

□ 来民開拓団の真相＝融和事業であった

□ 開拓団全滅から44年間も隠され続けてきた

明らかになったのは差別発言：大津町の民生員の方

・ 「融和政策の一環だったのではないか」

県の「拓務課」ではなく「社会課」が窓口だった

・ 当時の社会課の証言

三池さん（もと小学校の先生） 当時の来民小校長先生が進めた。

三池さん当時は融和教育 融和問題

来民小校長先生は有名な融和政策の権威者、社会課に異動されて責任者である。
校長先生の力が大きかった。

本筋は同和問題であって、犠牲者の人たちも同和問題の犠牲者ですよ

（２） 同和問題の犠牲者とは

「部落を「満州」に移せば、部落問題も解決するし、国策にも合致する。」

まさに一石二鳥の政策

- ・ 「満州移民」は、当時の重要国策
これから２０年間に１００万戸５００万人を「満州」に移住させる
 - ・ 全国から２５地区を特別指導地区に指定
 - ・ 熊本県からただ一つ特別指導地区に指定されたのが来民の部落
 - ・ 全国２５地区の中で、一番最初に移住したのが来民開拓団
- * 豊田一義さんは後ほど気づかれていた。融和政策、融和事業とは
* なぜ来民なのか？

なぜ部落を「満州」に移せば、部落問題は解決するのか？

（３） 差別は誰の問題か

池田賢市（中央大学教員）

差別は「される」状態が最初にあるはずはない。必ず、差別「する」という
行為が先にあるはずである。

部落差別をはじめ、あらゆる差別は、差別する側の問題である。

そうした社会の政治や政策や経済のしくみの中で、誤った見方や捉え方を植え

付けられてしまっている。

差別から解放されなければならないのは、差別されるがわではない。差別する側である。

（４） 差別から子どもを守ろうとする親や家族の思い

親はそうした厳しい部落差別とたたかって生き抜いてきた。部落差別の厳しさや、やり場のない怒りや悔しさを自分自身が体験していればいるほど、子どもには自分と同じ思いをさせたくないという思いが一層強くなる

子どもには、自分たちと同じ思いをさせたくない
子どもには差別のない暮らしをさせたい。
この思いが、私たちを「満州」に行かせたのです

親の思いを聞き取る

4 開拓慰霊祭：こどもの手に受け継がれて70年

慰霊のことば、解放子ども会全員

ついでに ことば 追悼の言葉

わたし かいほう こ かい さべつ やくそく
私 たち、解放子ども会には「差別をしない、させない」という約束がありま
す。それは、さべつ ひと ひと き はな とし だいじ いのち
差別は人と人を切り離し、時には大事な命をうばう、おそろしい
ものだからです。

はちじゅうねん くに ちゅうごく い かたがた
八十年前、来民開拓団として中国に行かれた方々は、

「子どもたちには、くろう
苦勞はさせたくない。」

「子どもたちには、さべつ う
差別を受けさせたくない。」

じぶん こ しあわ かんが ちゅうごく い
と、自分のことよりも、子どもの幸せを考えて中国に行かれたことを知りま
した。

わたしは、体力をつけ、上手になるためにバスケットの練習を毎日頑張っています。夏は、体育館がとても暑くなり、気分が悪くなるときもあります。でも、いつも家族が支えてくれるのでありがたいです。

開拓団の方々も、子どもたちを幸せにしたかったと思います。

八十年前も今も、家族の愛情に、変わりはありません。

もし、部落差別がなかったら来民開拓団はなかったし、私たちと同じ子どもまで、命を落とすことはなかったでしょう。一つしかない大切な命、家族の幸せ、それが差別によって、こわされたのです。

私たちは、みなさんの命をうばった戦争と部落差別をにくみます。

そして、人間がつくり出した、戦争や差別は、私たち人間が、なかまといっしょに、なくしていきます。

この開拓慰霊祭が始まったのは二百七十六名の方が亡くなられてから七年後のことだと聞いています。生活が大変な中でも供養を続けたいと願われた遺族の思いを心にきざみ、私たち解放子ども会は、これからも、開拓慰霊祭の灯を受け継いでいきます。

どうか、これからも、私たちのことを見守っててください。

二〇二二年八月一七日

解放子ども会 代表 表

うた
歌は、これまでの胸の中につまっていたものが、一気にほとばしり出るかのよう
に、一晩もかからずできあがりました。作者は故豊田 實 さんです。

豊田 實 さんは、1942年4月1日、第一本隊の一人として入植されました。

団では会計を担当されていたそうです。

しかし、1943年3月10日に現地で応召され、戦地に向かわれました。

この詩に曲をつけたのが、元遺族会会長の故吉岡信行さんの弟さんです。

上野義行といいます。

来民開拓団の歌は、以来、毎年8月17日の開拓慰霊祭当日、子どもたちによって歌い継がれています。

子ども会が引き継いだ開拓慰霊祭は、1952年から、今年で70年目を迎えます。これまでよく続いてきたなと思います。

開拓慰霊祭の最後は小中高生を中心に参加者全員で「来民開拓団の歌」を歌いました。

今年はコロナ禍によって残念ながら、子どもたちの参加を見合わせました。とても残念なことでしたが、子どもの代表が「追悼の言葉」を述べるときはいつも276名の無念の思いを永く永く語り継いでいかねばならないと思っています。

来民開拓団の歌 作詞 豊田 實 作曲 上野 義行

1、太平洋の波高く 亜細亜の暗雲垂れ込める

十六年の春四月 故山をあとに拓士らが

2、行くは満蒙大平野 見渡す限り高粱の

畑に鋤とる強者は 身はよし広野に朽ちるとも

3、果たさん使命開拓の 意気に燃え立つ来民村

入植四年夏八月 たわわに実る高粱の

4、かげに轟く銃声は 天の怒りか地の声か

防ぐに武器なき全員が 長恨呑みてり散り果てぬ

5、身は広原の土となり 永久に還らぬ同胞も

御^み霊^{たま}は故^こ郷^{くに}の土^{つち}を踏^ふみ 神^{かみ}しずま^る供^く養^{よう}塔^{とう}

6、星^{ほし}は流^{なが}れて年^{とし}変^かわり 亡^なき我^わが友^{とも}を今^{いま}迎^{むか}え

共^{とも}に偲^{しの}ばんあ^の最^{さい}後^ご 共^{とも}に讃^{たた}えん^{その}偉^い業^{ぎょう}

5 解放劇

解放劇の歩み（5回実施）

1992年（第1回）

11,15 ○ 隣保館10周年記念文化祭で子ども会(小・中・高合同)による解放劇「赤き黄土--地平からの告発 来民開拓団」を発表子ども会(小・中・高合同)で実施。

1993年（第2回）

8,22 ○ 第22回鹿本郡市同研集会特別部会で、支部を中心に遺族・識字学級・解放子ども会・保護者・教職員・町行政職員合同解放劇「赤き黄土--地平からの告発 来民開拓団」を発表

1994年（第3回）

2,20 ○ 第10回熊本県解放文化祭において、支部を中心に遺族・識字学級・解放子ども会・保護者・教職員・町行政職員合同で解放劇「赤き黄土--地平からの告発 来民開拓団」を発表

1994年（第4回）

5,28 ○ 部落解放全九州研究集会において、支部を中心に遺族・識字学級・解放子ども会・保護者・教職員・町行政職員合同で解放劇「赤き黄土--地平からの告発 来民開拓団」を発表

1994年（第5回）

10,15 ○ 総務庁等主催第1回「啓発フェスティバル」において、支部を中心に遺族・識字学級・解放子ども会・保護者・教職員・町行政職員合同で解放劇「赤き黄土--地平からの告発来民開拓団」を発表（約200名）

6 日中友好と遺骨収集

墓参に参加して、故、初代元会長さんは「訪中報告」で次のように記されています。

車はいよいよ懐かしい団本部があった部落に着いた。われわれは、36年振りについに来たのだ。遺体はどうなっているのだろうか？早く探したい。はやる気持ちを抑えながら、まずロウソクと線香を持ってきているから処分したいと申し入れたところ、それでは死没者全部墓地に埋葬してあるから、代表者数名来て下さいとのことで、6名を指名して案内された墓地に行き、ここが全員の墓地です、と教えてもらいました。なるほど小高く盛り上がっていて、36年間墓標もなく、短い芝生のような草の上にわれわれはひざまづき、275名が眠っている墓地の砂を握りしめて直接自分の皮膚に感ずることが出来ました。

故、2代目元会長さんは「訪中報告」で次のように記されています。

今回は私どもが長い間待ち望んで居りました墓参のための訪中が実現しました。
これは何と申しまして30数年に及ぶ5区の子ども会を中心とした開拓祭に、5区のみさんはもとより町を挙げて参加して頂き、8月17日の命日に盛大な供養を続けて下さったことが大きな力となった事を思います。当日殉難者の墓地へ行く。
元からあった墓地の一角に全員の遺体を葬ったという。これを信じて持参のロウソクや線香を土中に埋める。頭をたれて275名の冥福を祈る。又、いつの日か再びこの地に来て遺骨収集の実現をここに誓いながら墓地を離れる。

前会長 前会長さん・・・「私の生き方の原点」

これまで昔と今をつなぎながら、いろんな話をしてきました。その思いはまず、大人としての責任からです。子どもたちを守り、励ますのは私たち大人の責務と思っています。私たち大人が勉強し、部落差別をはじめあらゆる差別を

なくす力をつけていくことが大切。そして、子どもたちには保・幼・小・中・高を通して、人権を大切にできる学習をつくって行って欲しい。私たちの幼い頃は、ムラから誰も幼稚園には行っていませんでした。やはり全体的に貧しかったからですね。当時は来民幼稚園がすでにありました。それで、最初、小学校に入学した頃はかなり学力の差があったように思います。小学校3年頃には努力して追いついていましたが、やはり早くからの教育が必要です。また日中交流にもつなげて、3年に一回は276名の供養のため墓参を続けて欲しいです。当時開拓団の生活は現地の人たちとの争いはなく協力していましたと、一度「やなぎ」の木を燃料にするため、互いにもめたと言うことは聞きましたが、日頃は大変友好的な関係だったそうです。遺骨収集と墓参、日中友好実現その思いで、遺族会会長を30年続けて来ました。これからも8月17日に区の主催で子どもたちが中心に開拓慰霊祭を受け継ぎながら、差別の現実には学び差別をみんなの力でなくすよう乗り越えて行ってほしい。我が子にもしっかり勉強して、差別に負けず生きて欲しい思いで、時には厳しくも言っていました。部落差別をなくす解放運動につなげてほしい。それは、私の生き方の原点になっています。

訪中・訪日の経緯 2022年4月29日作成

1980(S55),4 , ○ 厚生省主催による政府派遣中国東北地区死没者慰霊友好訪中団に遺族1が県代表として加わる。

1981(S56),5,21~28 ○ 部落解放同盟熊本県連合会の要求により**第1回旧来民開拓団友好訪中団（18名）が実現する。**（遺族12名、県町行政等＝18名）

1990(H2),10,17~24 ○ **第2回友好訪中団（～24日まで）森山英治、部落解放同盟（11名）が実現。**

（遺族8名、県町行政等＝11名）

275名の眠る墓地に向かってバスの中から手を合わせて祈る。

宿舎にて慰霊祭を行う。記録森山

1991(H3), 7,15 ~20 ○ 第1回訪日・来町団（鹿本中3年生と交流する）（20日まで）
中国吉林省人民政府弁公庁副主任・史憲章、外事弁公室・王文潔、五
家站鎮長・郭洪軍の3氏を鹿本町に招待。
日本の風習について理解を求める。
鹿本中体育館で紹介。交流：鹿本教育集会所で解放子ども会と交流
学習会の内容を説明。作品を紹介。

10,26~11月2日 ○ 第3回訪中団（11月2日まで）
第3回友好訪中実施。（遺族9名を中心に合計14名）
中国側の理解により、全員が埋葬されている場所まで行き、ローソク、
線香を供え、心行くまで手を合わせることができた。

1992(H4),7月20日~25日 ○ 第4回訪中団
第4回友好訪中実施。（遺族2名、県町行政等＝6名）
事前協議のため
10月28日~11月4日, ○ 第5回訪中団
第5回友好訪中実施。（遺族3名、県町行政等＝9名）
遺骨の一部を持ち帰る。

1993(H5)4月~1996 (H8) ○ 古澤裕氏（葵き精機社長）が民間の立場から何度も中国を訪
問。多大なるご尽力をいただいた。このご協力により遺骨収集
実現に大きなはずみがついた。

1994(H6)3月6日~10日 ○ 中国吉林省人民政府外弁公室 梁吉唱主任・王韓の2氏を招
待。日本の風習について理解を求めるとともに、今年が50周年
を迎えるため遺骨収集の実現を訴える。

10月17日~22日 ○ 第6回訪中団
第6回友好訪中実施。（遺族5名、町行政等＝9名）

1996(H8), 9,28~10月7日 ○ 第7回訪中団、10月2日墓参（満ソ殉難者慰霊顕彰会主催）
第7回友好訪中実施。（遺族6名、町行政等＝11名・熊本県友
好訪中団31名実施。）
方正県の公墓視察。蓮花村の墓地を整備すること。

11,21~22 ○ 第3回訪日・来町団と交流する
中国吉林省人民政府外事弁公室 葵長精副主任、王文潔副処長
吉林省青聰・劉廣偉秘書長の3氏を招待。遺骨収集について理解を
深める。

1997(H9) 4,21~24日 ○ 東家嘉幸衆議院議員、古閑三博県議会議員、中嶋憲正鹿本町長が
訪し、吉林省政府、吉林省紅十字会、五家站鎮、蓮花村当局者と協
議

5,7~15・第4回訪日・来町団と解放こども会が交流する

5,9・山鹿市で、訪中団の歓迎レセプションを行う
中国吉林省人民政府外事弁公室・宋起明副主任・王文潔副処長・李尚軍五
站鎮蓮花村長の4氏を招待。

6,23~28・第8回訪中団、275人の遺骨の一部が鹿本町へ帰ってくる。

遺骨の受取に遺族5名、町長、議長等8名が訪中
豊田巳喜彦・豊田節子・宮本正直・川上謙次・前川範男 : 村上親二郎支長、谷
川役場
吉林省紅十字会から来民開拓団遺族会長に遺骨が引き渡される。

6,28・第8回訪中団の帰還式典、報告会が行われる

1998(H10) 5,13 ○ 第5回訪日団来町、吉林省外事弁公室副主任、処長、吉林省紅十字会副
会長、扶余県人民政府副県長、五家站鎮長

5,15 ○ 山鹿市で、訪中団の歓迎レセプションを行う

2000(H12) 7月 第9回訪中 日中友好会館建設懇話会（鹿本町と遺族会）

10月 第10回訪中 日中友好会館建設進捗状況視察

2001(H13) 5.28 第11回訪中 日中友好会館落成式・日中永久和平の塔除幕式が五家站鎮
にて潮谷義子熊本県知事以下訪中団と行われる。

7月 第5回訪日・来町団と交流・懇談会が行われる。

8月 鹿本町蓮花村学校建設実行委員会設立（遺族会と町民など）

11,5 第12回・蓮花村小学校建設起工式（鹿本町から参加）

2002(H14) 7,6 第13回・蓮花村小学校・墓地公園落成式（日中友好県議員団古閑団長
以下出席）

2004(H16) 8,5～9 ○ 第14回 子ども会訪中・交流「鹿本町日中友好交流訪問団」の実現（小中高子ども会7名参加）

***これを最後に訪中・墓参はありません。**

2007(H19) 8,17 ○ 開拓慰霊祭で275人の遺骨から276人と記載される。

7 授業実践

授業実践：鹿本支部・慰霊塔の前、地域の教材「来民開拓団の真相」の聞き取り
2014年7月13日生徒たちは、聞き取り後、さくらさんは、さちさんは、

2014年7月13日（日）10：30～さくらさん 中学校2年生

私は当日行った時、悲しい気持ちになりました。

魂の終着点のように見えました。慰霊碑を見ると、たくさんの亡くなった来民開拓団の皆さんがすぐ目の前にいるようでした。周りに来られていた人々は、来民開拓団関係のご遺族の方々と、あいさつすると「こんにちわ。」と返してくださいました。皆さんはいろんな活動をともに過ごしてこられたので、とても仲がよいように思いました。

私はこの日の活動を通して「来民開拓団」の事実を忘れず、たくさんの人々に知っていただけるように努力したいと感じました。劇にしました。

2014年10月12日（日）鹿北中清流祭で「来民開拓団の真相」の劇に取り組んでいました『劇が終わってから、みんなが自然にありがとうございました。』と挨拶してくれた。とても嬉しかった。」と、支部長さんが劇を見られて感想を語られた。

「来民開拓団の真相」～クラス劇を終えて、たかしくんが生徒たち～

○この劇を通して、この劇を見て何か思ってくれたらいいなと思いました。自分たちの知らないところでたくさんの人たちが差別によってなぜ死ななければならなかったのかとこの劇をする前から学習をして思っていました。部落差別がなかったら全員が楽しく生活することができていたと思います。学習をする中で一番強く思ったのは「どうして部落差別があるのか」「なぜ全員が仲良くすることができないのか」について思っていました。その思いで劇をしていくとだんだん劇の人物の考えや思いを知ることができました。全員、「子ど

ものため」を第一に思ってしまったことなのに、どうしてこんな悲しい結末になったしまったのかだんだんわかってきました。この劇を通して、たくさんの人に自分たちの思いを伝えることができたと思います。この思いをこれからも大切にしていきたいです。(たかしくん)

鹿本支部長松川さんに、講話して頂き、一人一人が家族の暮らしや労働について見つめ直した。そして質問から、幾度も幾度も自分の暮らしを見つめ、生徒たちは語っていった。

「来民開拓団の真相」～自分の暮らしや家族の暮らし・労働を見つめて、綴り、語ろう～ 2年さくら

私の家族は、祖父祖母、父母、姉妹3名の7名の家族です。しかし、一つだけ恥ずかしく思っていたことがあります。それは祖父のことです。私の祖父は、手や足が上手く動きません。それに耳もおくなくています。手や足が上手く動かせないので、歩くのが遅かったりもします。今まで何回もそのせいで事故にあったこともあります。なので、車は二人乗りの車に乗っています。水曜日の部活がない日などは、みんな大きい車で迎えに来てもらうのに、私の祖父は、二人乗りの小さい車で迎えに来ます。だから、少し恥ずかしいと思っていました。いつもは優しい祖父なので大好きなのですが、その時はいつも「もっと元気だったらいいのにな」などと思ってしまいます。しかし、来民開拓団の学習をして、それも差別していたことに繋がるということに気がつきました。今考えて見ると、身体が動かなくなってしまうのは、自分になりたくてなったわけでもないし、わざわざ迎えに来てくれるだけで感謝しなければならないなと思いました。

来民開拓団の学習の中で、たくさんのことに気付かされた気がします。今まで気付かなかった、私がやってきた差別に気付かされたと思います。これからはみんなに感謝したいと思います。そしたらみんなが笑顔で、毎日を楽しみ過ごすことができると思います。

「来民開拓団の真相」の劇・鹿北中清流祭で、2014年10月12日（日）2年生全員

今から72年前、中国の地で276名が集団自決をしました。その真相と、来民開拓団慰霊祭「たたかひの祭り」の心を受け継ぎながら、差別の構図を問い、差別のしくみを変える、**終業式2年生代表、孝くんはが、2014年12月24日、**

「2学期の一番の思いでは清流祭です。1学期人権学習をした「来民開拓団の真相」に取り組みました。差別によって何の罪のない子どもや女性、お年寄りまでが集団自決に追い込まれました。劇を練習していく中で、どうすれば良くなっていくかを自分たちで考えながら取り組むことができました。自分たちで工夫する力がついてきたと思います。沖縄でも同じようなことが起きていることを学習しました。修学旅行でも「戦争は最大の人権侵害」であることを2年生全員でしっかり学ぶことができました。」

富慈園・鹿本小、(中富小・稲田小、来民小)紙芝居教材づくり・鹿本中・鹿本商工・鹿本農高・・・授業実践をすこしずつしていわれています。

まとめ

自分のくらしを見つめ、語り合う実践を通して、互いに尊敬しあうなかまづくりができてきました。

人権教育は実にすてきなものです。命のつながり創りや重ねあいが可能な教育なのです。人間が人間になっていける教育なのです。

人間の優しさと尊厳のかがやきに貫かれた人権教育にさらなる自信と誇りをもって歩んでいきたいと思います。

人権教育はけっして人を変える教育ではありません。

まず、「自分が変わる教育」です。

「ともに立つなかまがいる」と言いきる子どもたちとともに歩む中で、「子どもの中にこそ未来がある」という確信が生まれます。

私たちの教育活動は、私たちよりも少なくとも、30年以上の未来を生きる子どもを育てているのです。いのちをつないでいるのです。

そこには差別への怒り、反差別の思いなどぶれない軸を持ちながら、子どもと子ども、おとなとおとな、子どもとおとな、あるいは地域と地域がつながっていきます。

人と人のつながりこそが人権教育です。

人権教育の本質は、親子のきずなづくりです。子どもたちのなかまづくりです。その営みが差別をなくすことにつながります。

そして、人権教育が深まり拡がる中核は、職員のなかまづくりです。一人の悩みは全員の悩みという大原則を踏み違えてはならないと思います。ともに歩んでゆける中にこそ、人権教育は大きく呼吸を続けていきます。

長時間、ご静聴していただきありがとうございました。

体を大切にしながらともに頑張り合いましょう。

鹿本水平社創立 1 0 0 周年 記念講演会

鹿本「同和」教育研究会 5 0 年スタート記念行事

主催 鹿本水平社創立 1 0 0 周年記念講演計画実行委員会 日時

2 0 2 3 年 8 月 1 7 日（木） 1 0 : 3 0 ~ 1 2 : 0 0

場所 山鹿市鹿本隣保館 2 階大会議室

目的 「来民開拓団の真相」に学ぶ

対象 山鹿市民のみなさま 山鹿ブロック支部のみなさま

鹿本「同和」教育研究会のみなさま 5 区のみなさま

解放保護者会のみなさま 解放子ども会のみなさん

鹿本支部のみなさま 遺族会 どなたでも無料参加

仮題「来民開拓団の真相」と 「鹿本水平社創立 1 0 0 周年」

講師 エィミ・ツジモト プロフィール

フリーランス国際ジャーナリスト。米ワシントン州出身。日系移民の歴史や捕虜問題、米政治・外交などについての記事を日米両国で発表。共著に「漂流するトモダチ アメリカの被ばく裁判」・満州天理村「生疏里（ふるさと）」の記憶―天理教と七三一部隊など・・・昨年「満州分村移民と部落差別」（えにし書房）2 0 2 2 年 8 月 1 5 日初版

**水平社は、かくして生まれた。
人の世に熱あれ、人間に光あれ。**

大正十二年十月九日 鹿本水平社創立大会 100周年

水平社宣言は謳う。「吾々は、かならず卑屈なる言葉と怯懦（きょうだ）なる行為によって祖先を辱め、人間を冒瀆してはならぬ。」

尊敬しあい、自らを解放せんとする

『来民開拓団の真相』紙芝居
鑑賞会（DVD）
エイミ・ツジモト企画統括

日時 2023年8月17日（木）10：30～12：00

場所 山鹿市鹿本隣保館2階大会議室

目的 紙芝居「275人の遺書配達人」が現代に伝える 主催 旧満州来民開拓団遺族会

開拓慰霊祭・・・

子どもたちが部落の誇りを受け継いできている。

自主解放の原則 2023年8月17日（木）79回忌

部落解放子ども会・学校・地域の3者→「地域の教育力」

来民開拓団の慰霊祭を受け継ぐ 71 年解放子ども会が紙芝居作成等 狭
山県民集会・菟田野中学校との交流会・解放劇・日中友好等 山鹿市
鹿本町の実践、保・幼・小・中・高・地域がつながる。

熊本県下の水平社結成

1922 年 3 月 3 日 全国水平社

1923 年 5 月 1 日 全九州水平社結成

* 熊本県北部各地域：地方水平社の結成

1923 年 7 月 18 日 熊本県水平社

1923 年 9 月 2 日 菊池水平社

1923 年 9 月 24 日 菊池東部水平社（大津）

1923 年 9 月 30 日 玉名水平社

1923 年 10 月 9 日 鹿本水平社 来民町の城北座で開催

< 1923 年（大正 12 年）10 月 11 日 九州日日新聞 >

熊本県鹿本郡水平社大会は 9 日来民町城北座で開催、郡内は勿論、菊池・玉
名・福岡・熊本等の各地より、参加者一〇〇〇余名に及び多数の来賓も列席、
各県・郡代表者演説 熱誠面に溢れ舌端火を吐く之感あり

1923 年 10 月 10 日 全九州水平社第 2 回大会

1924 年 3 月 15 日 熊本水平社第 2 回大会 熊本市公会堂

全国水平社創立に学ぶ：1922 年 3 月 3 日

解放子ども会：自主活動の原点は・・・

1922 年、全国水平社が結成され、全国水平社宣言
この際我等の中より人間を尊敬する事によって自ら解放せんとする者の集
団運動を起こせるは、寧ろ必然である。

「全国少年少女水平社の結成」＜奈良では1922年7月3日＞
若き俺たちの兄弟よ！

私たちもこれから、一致団結して兄さんたちとともに水平線上の人となろうではありませんか

1923年全国水平社第2回大会のとき、解放子ども会が生まれる

奈良の山田孝野治郎（やまだこのじろう）16歳の少年掖上小学校（わきがみ）＜1906年（明治39）2月25日～1931年（昭和6）3月9日：25歳＞

「全国少年少女水平社の結成」のよびかけ

封建社会から明治時代にいたっても、部落民に対する教育上の不合理は依然として変わる所なく、小学校における差別事件は昨年だけでも54件の多きに達している。差別観念については自分は十分経験したことである。我々は悪夢の教育に従って蹂躪されつつある。自分等が学窓における屈辱から脱して水平社に浮かび上がるために少年少女水平社の創立を提案する者である。

奈良を中心に200社、自主解放の運動の原則

水平社運動の中で生まれた部落解放子ども会は、その誕生当初から「被差別民の自らの行動による絶対解放」といういわゆる自主解放の運動の原則と、「人間性の原理に覚醒し、人類最高の完成へ突進」という反差別共存の思想によって・・・